

平成19年 8月 12日

平成19年度 教師海外研修(ネパールコース)研修報告書学校名 高知市立追手前小学校担当教科 算数(全教科)氏名 波多野 拓有1. 今回の研修参加に際して、特に主眼をおいた点

私が小学生の頃(30年前近く)から井戸を掘るための募金をしていたことなどから、先入観として「貧しい国」というイメージを持っているネパールという国の現状をつぶさに見てきたいと考えている。

- 暮らし・人々の様子について
- 教育・学校およびその施設・備品について
- 子供たちの様子・思いについて

その中で、ネパールの特徴(過去から続くものも現状のものも含めた)を見出し、日本の特徴と比較対照することで、さらに深まりのあるネパールへの理解につなげたい。

特に、教育の分野に関しどのように行われているか、日本とのシステムの違いは何か、それに伴う問題はどんなものがあるか、を見てきたい。また、実際の学校の現場の視察を通して、子どもたちのありのままの姿、考え、望みなども知りたいと考えている。

2. 視察を通して参考になったこと／疑問に思ったこと

JICA所員、専門家、隊員やボランティアなどから話を聞くことで、日本人の目から見たネパール像が理解できた。また、視察やホームステイをする中でネパールの人々の日本に対するイメージや期待、ネパールの人々の考えを知ることができた。

日本人からは「援助を受ける国」という印象の強いネパールだが、実際にどんな支援を受けているのかの詳細を知らなかったため、保健衛生や教育、地域活性、上下水道、農業、経済・社会インフラなどの支援の現場を見ることができたことは大変参考になった。

特に教育の現場では識字率、就学率の向上を目指すために「2015年までに全ての子どもたちに質の高い初等教育を受ける機会を提供する」を合言葉に取り組んでいる事業にJICAが基幹として関わっていることに共感を覚えた。やはり、十分かつ適切な教育なくして個人の発展、生活の向上は無く、ひいては国家の発展も無いのであろう。日本においての日々の我々の業務もさらに力を入れていかなければと感じた。

実際に子どもたちの姿を見ると、学校に来ている子達はみな学ぶ意欲に溢れているように見えた。施設・設備ともに十分でない教室で頑張っている子どもたちに、そして懸命な教員らの姿にこの国の未来への発展を感じることができた。

一方、課題としては、それでも学校に来られない子どもたちの存在とまだまだ不十分な就学年齢に達した児童が全員教育を受けることへの社会の認知、絶対的な資金や技術の不足、あらゆる面でのインフラの不備、など山積している。どこから手を付けていいのかという状態であるかとは思われるが、一步一步確実に成果につながる支援を行ってほしいと思う。

それにしても、どこまで支援を続けていけば、国として自立していけるのだろうか、という疑問が浮かんだ。カトマンズ市内の大混乱の様子、市外の道路整備が進んでいない様子、いくつか見られたデモ、仕事をせずに佇むだけの人の姿などからは、国としてのベクトルが弱く、かつ定まっていない印象を強く受けたのが正直な感想である。

3. 教育指導への活用について

今回の研修で得た知識・経験を元に、どう教育指導に活かしていくかであるが、ネパールで得た現状を知識として教えるのみでは、見方の偏ったものになる上、広がり無いものとなろうことは容易に想像できる。また、貧困の実情を強調しすぎると「かわいそう」や「そこに生まれなくてよかった」などの感想が中心になってしまい、相手の文化を尊重しようとする視点での国際理解の心情を育みにくくなるであろう。

指導の対象となる児童が小学生であるということからも、遊びや食、音楽などの文化面を中心に相手文化に親しみをもち、学校での学習内容や生活様式の比較から自分たちとの共通点や差異点を見出し、それらを通してネパールの国情を理解していきたいと考える。

また、本校では青少年赤十字(JRC)活動に力を入れていることから、JRC委員会のメンバーや、それらからの働きかけによって全校児童へもネパールについての理解を深めさせていくことで、募金や学用品の寄付などの活性化への触媒とし、さらなる活動の発展につなげていければと考えている。

これらの活動を通していく中で、世界へ目を向け、世界のために活動できるような人材の育成を図っていきたい。

4. 研修に関する全般的な所感／意見について

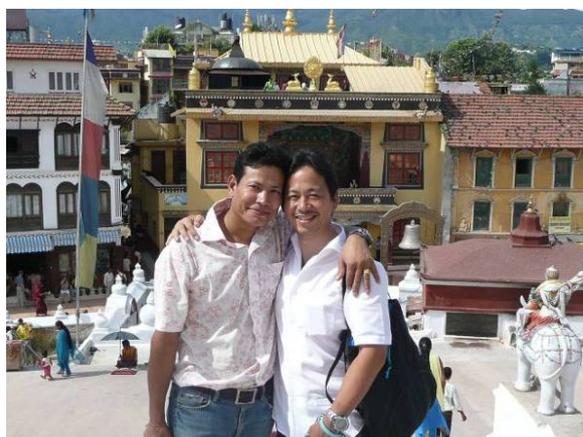
日程は決してハードなものとは思っていなかったが、実際はひどい渋滞や悪路のため移動に大変時間がかかったり、訪問先でお茶などの接待を頂いたり、進行が円滑にいかなかったりと、予定時間をオーバーしてしまい、結果的に余裕の無いスケジュールとなることが多かった。

これらについてはネパール時間と言おうか、致し方の無いところも多くあろうが、訪問先での進行などJICA側にすっかりお任せにしていたので研修を受ける側である我々がもっと事前に進行や質問内容、担当などを細かく決めておいたほうがよかったのではないかと感じた。そのためには事前の計画書が出来上がった段階で詳細な訪問先の概要や見学物などの予定(何が見られるか、どんなことができるか、等)をはっきりさせて頂ければありがたいと思う。

個人的には教員という立場もあり、子供たちとの交流を多く望んだが、授業の様子を見せて頂いたところが多く、休み時間などに自由に話をしたり、遊んだりということが少なかったことが残念に思う。その中でありのままの子供たちの姿を知ることができるのではないだろうか。

今回、ネパール人の通訳を2名付けて頂いたが、この2名の方たちのお陰で今回の研修の深まりがぐっと増したことを最後に付け加えたい。自分の稚拙な英会話能力を棚に上げてこんなことを申し上げるのがおこがましいことは十分承知の上で言うが、日本語の堪能な2名のネパール人はこちらの言いやすいことを適切に的確に相手に伝えてくれ、また同時にこちらに分かり易く伝えてくれた。われわれは日本語のまま伝えたいことをそのまま伝えることができ、痛痒を感じる事など全く無かった。

また、この有能な二人はありのままのネパールの姿を伝えてくれたり、一般的なネパール人としての考えを話してくれたりもした。移動中の様々な話は印象に残るものが多くある。二手に分かれての教材収集集中にも真摯にわれわれに接して下さり、大変頼もしく、ありがたく感じた。もちろんJICAの素晴らしい人選にも感謝するものである。



5. JICA四国に対する要望・提言



今回の研修は自身にとり、大変有意義かつ安全で楽しいものであった。それらはすべてJICA四国を始めとする関係者の皆様の御尽力があってこそのものだと大変感謝している。

提言などというおこがましいことはできようもないが、ぜひ、今後も同様の研修の機会を教員のみならずさまざまな日本人に幅広く与えて下さればと感じている。現地に赴いてこそ理解できることはもちろんであるが、日本を離れることで初めて日本と他地域を比較対照することができ、日本という国について改めて考え、感じ、理解することができたように思う。

要望という程のことではなく、気の付いたこととしてあげさせて頂くのであれば、チャーターして頂いたバスのドライバーの運転が荒く、移動の度に疲れてしまったこと、最後の日の半日を教材入手のために空けて頂いたのであるが、その半日を研修の中日あたりに当て頂ければ、疲れが出てきた頃に休息ができ、また、情報の整理や以降の活動への準備もできるかと思うこと、加えて予算の都合などもあろうが、丸一日、教材入手のための自由行動ができる日程があれば、さらに充実した研修になるであろうかとも思う。

しかし、これらにしても強いてあげればと言った程度であり、全日程を通し、事故なく安心して過ごせたこと、本心より感謝申し上げたい。

中でも引率の山本さんには大変お世話になり、感謝してもきれない程です。ありがとうございました。



6. 今後の本研修参加者へのアドバイス

出発前に言われていたことばかりですが…。

- ① コミュニケーションを密にしたいなら、英会話能力(現地語も)を身に付けておくべき
→やはり自分の口で、自分の言葉で伝え合えたら得られるものもさらに大きいと思います。
自分で聞けたら「聞きたいけど、どうしよう…」のような遠慮も要らなくなります。
- ② 研修中は考える余裕が無いので、出発前に何をしたいのかをはっきりさせておくべき
→立て続けに視察があります。おまけに言葉が解らないとメモ書きなどついていくのに必死です。
あれもこれも物珍しいため、写真の対象もたくさんあります。幅広く捕らえるよさも大切ですが、絞っておくとより深まりが増します。後の教材化にも役立つと思います。
- ③ チームワークが大切、勝手な言動は厳禁！(出発前に親しくなると吉、役割分担もしておこう)
→今回はメンバーが個性的かつ、いい人ばかりで楽しい旅となりました。団長や記録係、全体の会計やチア係など、得意や特徴を自分から積極的にアピールしてみんなの力を合わせよう。
- ④ 健康管理に留意(生水厳禁、食事のバランスに留意、睡眠時間の確保)して、無理をしないこと
→やっちゃいました、最終日。ホテルのポットの水が原因だと思います。それまでミネラルしか飲まなかったのに…。帰国の途で苦しみました。帰ってからも風邪を引いて点滴を打ったり…。
- ⑤ 楽しむ心を大切に、好奇心は最大のエネルギー!!!(迷ったらとにかく何でもやってみよう！)
→遠慮は日本人の美しい姿ですが、外国では何をしたいかが分かってもらえません。特に個人行動となるホームステイでは…。相手を尊重しながら自分の意思をアピールしましょう。

以上述べたようなことは言うまでも無いことと思いますが、私は①②が不十分だったため、後悔しました…。(④⑤も少し…)

7. 各訪問先の所感

日時	訪問先	発見したこと・学んだこと⇒それを何につなげるか？ その他所感
7月30日	JICA事務所 JICA所長宅	<p>JICA事務所で国の概要や安全情報を聞き、ネパール語のレッスンを受ける。空港から降り立ったその時から国の混雑ぶりを感じたが、やはりそれを裏付ける内容。</p> <p>所長宅で歓迎の夕食会を開いて頂く。それまでの道中の混雑や停電していた周辺地区、小さな住宅に住む人々とかけ離れた暮らしぶりに驚く。</p>
7月31日	カリキュラム開発センター 教育開発センター 教材センター	<p>ネパールの文科省にあたる機関と考えてよいと思うが、システムとしての一貫性に欠けるようでまだまだこれからなのだろうと感じた。国の機関というより、県教委、市教委のレベルといったら言い過ぎだろうか。ネパールの教育に対する課題は大きいと感じた。</p> <p>多民族、多言語のネパールはそれだけでも統一した教育を施すのは難しいと思われるが、そこをそのままにしておいてはいつまでも就学率も識字率も向上せず、結果、貧困国から抜け出せることは無いのだろう。とはいえ、就学率・識字率が低い現状では、教育システムを幅広く地方にも根付かせるのは大変困難があるように思われた。</p> <p>教科書を印刷している教材センターでは、印刷の専門家として日本のシニアボランティアが活躍されていた。各国からの援助による印刷機でたくさんの教科書が印刷されていた。たくさんの手が掛かっているのが印象的だった。機械化より人手の方が安いのだろう。野積みになり、ほこりをかぶった新しい教科書たちはまた来年に使われるという。そこにもシステムの不充実を感じた。</p>
8月1日	公立小学校4校	<p>印象的だったのは子どもたちの澄んだ明るい瞳と熱心に学習する姿。それに対して、校舎・教室、教材備品などハード面での学習環境が恵まれたものでないこと。</p> <p>物質的な条件についてはほぼ予想していた通りだが、公立学校でも結構な差があることに驚かされた。しかし、そんな中でも学ぶことはしっかりできており、教育の本質を見たような気がした。要は学習者が主体であり、学びを支援するのが我々の仕事だと。日本の子ども達には学びの意欲をどう持たせるかが課題であるから、ネパールの子どもの輝く瞳を見て羨ましさを感じたのも正直なところである。教育によって生活が変わる、そういった社会、そういった教育にしていけないと教育の役割は廃るばかりだろう。決して単に物があればいいのではない。</p> <p>ある学校では、狭く、本の無い名ばかりの図書室に似合わぬパソコンが数台入っていた。聞くと外国人が個人で寄贈してくれたものだという。電球が一つしかないような部屋なのに！ ネットに繋がらず、プリンターも始めから動かな</p>

		<p>い環境を整備して何になるのか？ コンピューターの学習と称して子どもたちはテレビゲームをしていた。子どもたちはこの学習が好きだという。この学校にはパソコンは必要ないと感じた。それ以前に必要な支援の内容・方法がある。ここで始めて支援・援助のあり方を考えることとなった。JICAが世界中でこの難しい課題に取り組んでいることがわかった気がした。</p> <p>訪問した学校では協力隊の皆さんの熱心な取り組みが成果を上げていた。しかし、隊員のいない学校、支援の届かない学校はどうなのだろうか？ カトマンズの中心からそれほど離れていないこの地でこの程度なら、遠く離れた地方ではいったいどうなっているのだろうか、この国の現実に気の遠くなる思いがした。</p>
8月2日	JICA事務所 浄水場、公共水場など 水道供給施設	<p>いわゆるライフラインの中でも中心的な役割を担う水道事業であるが、ネパールでは、気候や地形の条件、社会インフラ不足の点で十分でないことがよくわかった。</p> <p>ホテルの黄色い飲めない水にも相当驚いたが、雑菌に耐性のあるスーパーネパール人でさえ、体調を崩すという水質の悪化の話に、ヒマラヤの麓の豊富な雪解け水などという清しいイメージはすっかり消し飛ばされた。</p> <p>街中の公共水場に水瓶だけでなく、オイル缶さえ持ち込んで水を確保しようとする人々には日本レベルの清潔な水の供給より、まずは水源を確保し、十分な水量を与えるほうが先ではないかとも思った。</p> <p>とはいえ、道や川に多くの方がごみを捨てる不衛生な状況も改善せねばならず、どこから手を着けていいのか、この国の混迷振りには相当なものである。</p> <p>JICAや専門家、隊員の熱心な努力も今はまだ焼け石に水の状態に思え、ここでも気の遠くなる思いがした。</p>
8月3日	NFEC(GLC) CASP 非正規教育クラス	<p>正規の学校(公立学校)で一応無償の教育が受けられるのに非正規教育が必要だという。それは日本の不登校の現状とは大きく違う原因によるものであった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地理的に学校へのアクセスが制限(地形、距離) ○就学する機会が無い(労働児童、路上生活児童) 就学への経済的捻出ができない(低所得家庭) ○学校へ行きにくい子ども(カースト、ジェンダー) <p>非正規教育といっても正規教育と同等な教育を受けさせようとする志の高いものではあるが、政府機関が運用しているという二重構造を感じさせるものであった。あらゆる手段を講じないと教育を浸透させることができないというこの国の現状の厳しさがわかった。</p> <p>説明はわかりやすく日本語で行われた。そう、中心で活躍されているのだ。ハードではなく、ソフトとして役立つおられることが素晴らしいと感じた。ネパールの教育を支える日本人、ずっと人々の心に残ることであろう。</p> <p>実際に孤児院を併設した非正規教育クラスを訪問することができた。ここは政府管轄ではなく、団体が運営している</p>

		<p>という。いろいろな環境に置かれた子どもたちがみな仲良く生活していた。決して恵まれた状況にあるとは言えないが、おかれた状況の中で精一杯生きている子どもたちのエネルギーを感じることができた。それは今まで訪問した教育施設の中で一番感じたことだった。困難はこれからも続くだろうが、強く生きていってほしいと願う。</p>
8月4日	ホームステイ	<p>一般の家庭とはおそらく違うであろう快適な住環境の中でホームステイさせて頂いた。ホテルと変わらない環境に覚悟はどこへやらという感じだった。</p> <p>一方、訪れた市場では一般の生活が営まれており、この国にある格差のギャップを強く感じる事ができた。</p>
8月5日	ホームステイ	<p>公立学校を訪問させて頂いた。幼児クラスから高校までであるこの学校では定期テストを行っていた。どの子も無言で真剣にテストに向かっており、児童・生徒に対しても、教員に対しても教育にかける意気込みを強く感じた。</p>
8月6日	近郊農場2ヶ所	<p>農家を2軒見学した。なぜ2軒と思ったが、比較をするのに対照的であることがわかった。1軒目はこの国の開発途上ぶりをよく現しているような農家であった。急峻な段々畑に所狭しと様々な作物を植えていた。支援の成果もあり、この国の農家としてはまだ収入があるということであったが、決して余裕があるようには見えなかった。2軒目は1軒目より麓に近いこともあってか傾斜地ではあるものの整備された農地は日本のそれに近いものを感じさせた。そして暮らしぶりもずいぶんよさそうである。</p> <p>両方で出された梨でその理由がわかった。同じ支援を受けた梨の栽培でもその出来が全く違うのだ。見通しのある計画とそれに沿った実行がいかに大切かがよくわかる、よい具体例であったように思う。</p>
8月7日	JICA事務所	<p>福田次長は話の中でネパールにはリーダーシップを取れる人材が不足しており、そのことが国の混迷を解消させるに至らない原因の一つだと述べておられた。私も全く同感である。現地で汗水流して働いているスタッフやボランティアの方々に失礼なことは百も承知で言うと、単なる手助けは相手の自立を促すことに役立たないと感じた。</p> <p>通訳の方が「お金は要らない、日本で使い古された技術がほしい」と言っておられた。やはり単なるものでなく、確かに根付く技術をネパールに伝えることができれば、きっといつか彼らも自立できる国を造ることができると思う。</p> <p>適正なニーズの把握と適切なサポート、十分に検討されて行われているであろうJICAの事業がこれからますます発展し、全ての人々が幸せに近づいているネパールの姿を心より願うものである。</p>